

夏の沢登り

(2007年7～8月の記録)

秋田 誠

1. 中御所谷西横川

--- 中央アルプスの好ルート ---

日程及び天候：2007年7月27日(金)～7月28日(土)晴

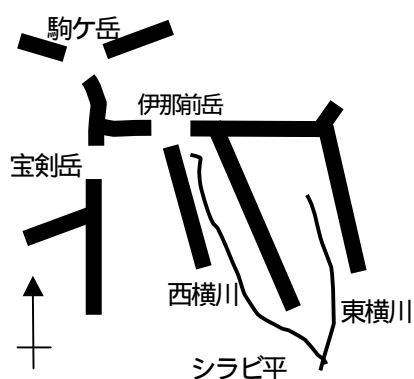
参加者：L秋田誠、小倉保久(福島労山)、中越孟子(志峰会)、佐藤友彦(大阪ぼっぼ会)

タイム：

出合堰堤(標高1,670メートル)7:35 --- 東横川との二俣(標高1,740メートル)7:50

--- 大滝上8:45 --- 左岸尾根標高2,500メートル10:50 --- 伊那前岳の肩(標高2,830

メートル)12:15～12:25 --- 北御所谷バス停15:00



日曜日に予定されていたグループ山想の谷川岳集中登山は、東日本に居残っている梅雨前戦が活発化したためあっさり中止になってしまった。すでに集中登山に向けて自宅を発っていた私たちは、今さら家に戻る気はさらさらなく、梅雨が明けたばかりの中央アルプスに向かった。急な行き先変更だったので、腰を据えてルートを吟味する余裕はなかったので、すっきりと楽しい沢登りがしたいと思った私は、以前から頭の隅にプランしていた中御所谷の支流、西横川遡行を提案したところ、同行の小倉君達は快く賛同してくれた。

日本登山体系によれば西横川は30メートルの大滝を有し、大滝の前後には快適な花崗岩の滑滝が連続していると記されていた。実際、この谷の遡行は期待を裏切ることのない愉快なものだった。ただ、記録に源頭部を横切ると記され、国土地理院の地形図にも標高2,500メートル付近に描かれている登山道(長谷部新道)が廃道となっていたため、想定外のハイ松漕ぎを強いられたことは大誤算だった。

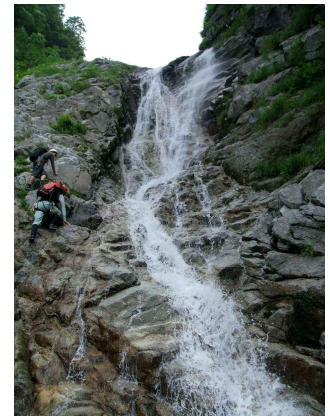
ロープウェーを待つ登山者の喧騒を背に、シラビ平からバス道を戻り小尾根をひとつ回り込むと横川の出合である。この間5分にも満たない距離だ。狭い河原を睥睨するように屹立する堰堤の基部には、男女10名ほどの沢登り訓練風の先行パーティーが賑やかに出発準備をしていた。私達も橋の袂から踏み跡伝いに河原に降り、順番待ちを嫌って件のパーティーに先行して出合を後にした。きっと先行パーティーの人達は、挨拶も交さず、そそくさと発つ私達を快くは思わなかっただろう。

出合に連なるの2つの堰堤はいずれも右岸の踏み跡から簡単に通過した。堰堤の上流で沢は開けたゴー口となり左岸から枝沢がガレの中から染み出るような細い水流で流入した。出合から15分で二俣となり、右から東横川が緩やかなスラブ滝15メートルで合流した。先頭を登る佐藤君は29才の若さでやたらペースが速い。私のようなロートル・クライマーとの山行経験があまりないようで、とぼとぼと後続するオジサンのことは意に介せずマイペースですたすた登って行く。気合を入れて歩かないことにはすぐ間が開いてしまいそうだ。29と云えば長女よりも若いのである。小倉が親子だからかうのも頷ける年の差だ。

梅雨が明けたばかりにしては沢の水量は少ない。この谷では雨水は山腹に保たれることなく一気に流下してしまうのだろうか。とすれば、滑滝の多い谷だから、一旦雨に見舞われたらさぞ激しく増水

することだろう。小滝が段々に連なる西横川に入る。流れに足を踏み入れても冷たさは感じず、今日は快適な沢登りが出来そうだ。

各自思い思いのルートで連続する滑滝を攀って行くと、谷幅が狭まり立派な釜を抱く5メートルの直瀑が現れた。落ち口の向こうには絹糸のように水流を岩肌に美しく絡みつかせている30メートルの大滝が望まれた。前衛滝を護る左右の壁は逆相でとても攀ることは出来ないの、釜を回り込み左岸のつるつるのスラブを斜上して落ち口に抜けた。5、6メートルのスラブであったが、フリクションに頼り細かいホールドを拾う登りは、西横川の核心であった。遠目にはロープが必要かと思われた大滝は、ホールド豊富な右岸のリッジ状の岩場を攀り、容易に落ち口に立つことが出来た。湯水期にはアンザイレンして、傾斜の強い流水溝に沿って攀るのも面白いだろう。また、積雪が本格化する前であれば、この滝はアイスクライミングの対象となりそうだ。大滝上で標高はおおよそ1,900メートルとなる。



大滝30mの登攀



夏はシャワーがサイコー！

大滝の上流も相変わらず快適な花崗岩の滑滝が続いた。東横川を分けて後、谷は顕著な支流を合わせることなく高度を上げたが、標高2,030メートル付近でようやく水量比3:1の二俣となった。ゴロの右俣に比べて、細い水流のトイ状の滝2段10メートルを落として出合う左俣は暗い感じがした。明るく開けた右俣に入りたいところであったが、水量の多い左俣にルートをとった。帰宅して読み直した日本登山体系の記述では右俣が紹介されていたが、沢の内容としてはいずれも大差はないようである。

流れが細くなり、兩岸を成す尾根も低くなってきた。源流の様相を現し始めた谷をなおも辿ると、やがて水流は灌木の根元に消え、踏み跡らしきものが認められた。遭難者を追悼するプレートが埋め込まれた大岩もあった。地形図に記された登山道はこの付近で谷を渡っているものと思われた。浅くなった谷の兩岸の尾根に登山道を求めたがそれらしい痕跡は目に入らなかった。時間はまだ充分あったので、私たちはしばらく小倉君に教えてもらった「ミヤマメシダ」なる山菜採りに興じた。ミヤマメシダ、深山飯だ？とても山菜に通じているとは思えない小倉の指南である。何だか怪しげな名だ。ミヤマと付ければいってもんじゃないよと思った。

彼によれば、先日屏風岩のアプローチで大阪労山の山菜の先達に教わったとか。しかし、下山後油炒めしてビールつまみに恐る恐る食したところ、意外なことにまずまずの味だった。そして、何よりも翌日も全員元気であった。帰宅後インターネットで調べると、ミヤマメシダは「みやま・め・しだ」であり「深山雌羊歯」と書くこと、ごみのように食用になる羊歯類だということが分かった。



ミヤマメシダ

登山道から安楽に下山する目論見は崩れた。私たちは左岸の尾根に取り付き覚悟を決めて稜線を目指し藪を漕いだ。初めは灌木の背丈が低くて楽な藪漕ぎだったが、稜線を行く登山の顔が見えそうな高さまで登ると身の丈を超えるハイ松の海となり、思いもよらぬアルバイトを強いられてしまった。